

つくばで輝く研究者

OZAKI ryosuke 尾崎 諒介 さん

国際農林水産業研究センター社会科学領域研究員



ペルー・リマ市出身。2010年立命館大学アメリカン大学共同学位プログラム修了。11年青年海外協力隊としてウガンダ共和国に派遣。22年東京大学農学生命科学研究科を修了。博士(農学)の学位を取得。22年4月より現職。開発途上地域での農業技術普及とその効果に関する研究を行っている。

《農業技術普及の要因と効果を統計で探る》



販売している野菜と種子についての市場調査

開発途上地域の貧困や食料・環境問題への解決に必要な現地の農家への先進技術導入には現地の人に取り入れてもらうという大きな壁がある。その意思決定の要因や、農家の生産性の向上が所得や栄養状態にどのような効果をもたらすのかを直接現地に行き調査をする。「食料問題の解決には農業技術の普及が不可欠ですが、実際にその技術を使ってもらうためには現地の実情を理解することが大切です。普及する側の押し付けにならないよう、丁寧に調査をして統計を出すことで特に食料問題に貢献することが大きな目標です。」

《海外勤務を目指して留学、就職、再進学》
父親の仕事で滞在していたペルー・リマ市で生ま

農業技術普及のための 現地調査で食料問題解決へ

れ、2歳から神奈川県横浜市で育った。さまざまなことに興味関心があったという幼少期から「これをやってみよう」と言われると臆せず「やる!」と答えるような子でした。体が小さく苦手なことも多かったという小学生時代だったが運動も勉強も楽しみ、中学校では英語と数学のシステマチックな感じが好きだった。兄が進学し、その自由な校風に惹かれて神奈川県立厚木高校に進学。バレーボールに打ち込んだ。地元から離れてみたという選んだ立命館大学では2年間、アメリカン大学国際関係学部米ワシントンDCに留学。「いずれは海外、特に世界遺産があるような国に関わる仕事をしたい」と思いから、貧困や飢餓の問題、開発援助に関して学ぶ中で憧れの地域の深刻な状況を知り、二度現地を見て何をすべきか考えたいと卒業後に青年海外協力隊に参加。2年間、ウガンダ共和国東部ソロティ県

つくばの生活

の農村部に派遣された。「稲作の普及活動が任務だったが、現地の人と同じように家畜を飼いながら生活をし、冠婚葬祭に参加したり近所の子どもたちと遊んだりと現地の生活や考え方を学んだ貴重な経験でした。その後、民間の金融機関に就職するも協力隊での経験を深めたいと東京大学大学院へ入学ほどなくマダガスカル島の稲作に関するフィールド調査を任せられたのがきっかけで、現在もマダガスカルを対象に「技術と人との橋渡しをする」研究を行っている。

妻と長女、次女との4人暮らし。つくばに来て4カ月と日が浅いが「広い公園が多く国際色が豊かな環境が気に入っています。これから家族で多くのことを経験していきたい。」



調査の協力者とともに食事(マダガスカル)